

## 奈良・如意輪寺所蔵 源慶作厨子入り蔵王権現立像について — 13 世紀興福寺との関係に着目して —

松井 美樹 (東北大学)

奈良・如意輪寺の蔵王権現立像(以下、本像)は、嘉祿 2 年(1226)、源慶によって制作された。源慶は、東大寺南大門金剛力士像や興福寺北円堂弥勒如来坐像の制作に参加した運慶の高弟と目される、運慶・快慶と同年代の仏師である。慶派については、基礎的な研究によって各仏師の作例が詳細に報告されており、また近年は、造像背景にある信仰、快慶らが用いた「巧匠」の意味などに関心が集まっている。しかし本像については、運慶高弟の作例であり、数ある蔵王権現像の中で傑出した出来映えを誇るにもかかわらず、詳しく論じられる機会はなかった。蔵王権現が仏典に説かれぬ日本独自の尊格であり、仏教美術史上では辺縁的なものとして扱われてきたこともその理由と考えられる。そこで本発表では、蔵王権現という尊格を必要とした鎌倉時代初期の文脈をふまえ、制作を依頼した主体者、本像の制作意図について試論を述べる。

まず、本像の特色として頭上の三鈷と左手の剣印の凶像からは、仏法を軽慢する心を生じさせる魔衆を防ぐ機能が想定できる。また、造像銘の「工匠」は、仏や靈験像の姿と機能を写し取ることができ、仏師を示す「巧匠」と同義とみられ、本像の肉身や着衣の表現は靈験像を意識してなされたものと解釈できる。本像制作の前年には靈験像としてのいわれを持つ蔵王権現像を安置した蔵王堂が焼失した。源慶の起用には、焼失した靈験像を再現できる「巧匠」という意義があったと想定される。

本像を納めた厨子には、金峯山にまつわる賛詩と神像や童子像があらわされており、扉を開くと神々が蔵王権現を圍繞する立体の吉野曼荼羅となる。従来この厨子は、後醍醐天皇の関与を示す伝承や底板裏の墨書に従って延元元年(1336)の作とされてきた。しかし、大東急記念文庫所蔵の金剛般若経見返絵などと絵画表現を比較検討することにより、像と同じ 13 世紀の制作と見なすことができる。

13 世紀前半、金峯山衆徒を管理する金峯山検校には信円や範円などの興福寺学侶が就任していた。この時期は、大峯から葛木山へ斗藪する興福寺堂衆を中心とした修験道前身組織の形成期にあたること、この斗藪は、堂衆の担った東大寺受戒会と関連することが指摘されており、金峯山は興福寺学侶・南都堂衆と強く結びついていた。源慶が興福寺北円堂の造像に従事していたことを勘案すると、この制作を依頼した主体者には、金峯山検校を担った興福寺学侶がふさわしい。また厨子の童子像や賛詩が典拠とする『諸山縁起』が大峯・葛木山・一代峯の口伝類の集成であることから、山内で像と厨子から成る吉野曼荼羅に対面したと想定できるのは、大峯や葛木山を斗藪した南都堂衆である。

以上より、源慶作の厨子入り蔵王権現立像は、13 世紀前半における南都堂衆の斗藪と興福寺学侶の関係を表す、修験道形成期の山岳信仰を解明する上で重要な作例であることを提示したい。